

# 石灰岩の丘に暮らした狩猟採集民

—トルコ、チャクマックテペ遺跡第2次調査(2022年)—

三宅 裕 筑波大学人文社会系教授

板橋 悠 筑波大学人文社会系助教

シャーヒン・ファトマ チュクロヴァ大学文理学部准教授

## Hunter-gatherers Living on the Top of the Limestone Hills: The 2022 Seasons of the Excavations at Çakmaktepe, Turkey

MIYAKE, Yutaka Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

ITAHASHI, Yu Assistant Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

ŞAHİN, Fatma Associate Professor, Faculty of Humanities and Natural Sciences, Çukurova University

### 1. はじめに

トルコ共和国南東部シャンルウルフア市周辺地域では、ギョベックリ・テペ遺跡の発見やイエニマハーレ遺跡からのほぼ等身大の人物像などの出土を受け、新石器時代、特に先土器新石器時代への注目が大きく高まることとなった。その後実施された遺跡踏査においても、ハラフ平原を囲む石灰岩の丘陵地帯からは、カラハンテペ遺跡をはじめとして多くの先土器新石器時代の遺跡が発見され、それまで居住にはあまり適さないと考えられてきた丘陵地帯に密度高くこの時期の遺跡が分布していることが明らかになった。さらに、その遺跡の多くからはT字形の石柱が確認され、ギョベックリ・テペ遺跡で明らかになった公共建造物の存在や儀礼祭祀・シンボリズムの体系がこの地域において広く共有されていた可能性を想定できるようになった。

2019年にカラハンテペ遺跡において本格的な発掘調査が開始されると、大型の公共建造物、T字形の石柱、人間やヒョウを象った彫像などが発見され、ギョベックリ・テペ遺跡に匹敵する規模をもつ遺跡として注目されるようになった。2021年にはシャンルウルフア周辺の新石器時代の遺跡を対象としたプロジェクトが立ち上げられ、遺跡の特徴的な立地に因んで「タシュテペレール(石の丘)・プロジェクト」と命名された。このプロジェクトの一環として、カラハンテペのほかにも、サイブルチ、セフェールテペ、ギュルジュテペ、ハルベトスワン、ソウット・タルラスなどの先土器新石器時代の遺跡が発掘されることになり、

今回私たちが発掘調査を実施したチャクマックテペ遺跡もその一つである。

### 2. 遺跡の概要

チャクマックテペ遺跡はシャンルウルフア市の西方約20 kmに位置し、石灰岩からなる丘陵の尾根上に立地している(図1)。明確なテルを形成していないため、正確な遺跡の規模を知ることはできないが、石器が散布している範囲は広範囲にわたっており、ある程度の規模をもった遺跡であると考えられる。遺跡の年代については、放射性炭素年代が得られていないため未確定の部分があるが、エル・キアム型尖頭器が出土していることや検出された遺構が半地下式の円形プランであることを考えると、先土器新石器時代初頭のPPNA期の遺跡であるとみることができる。

チャクマックテペ遺跡は、チュクロヴァ大学(アダナ)の調査団によって実施された遺跡踏査の際に発見



図1 チャクマックテペ遺跡と周囲の景観

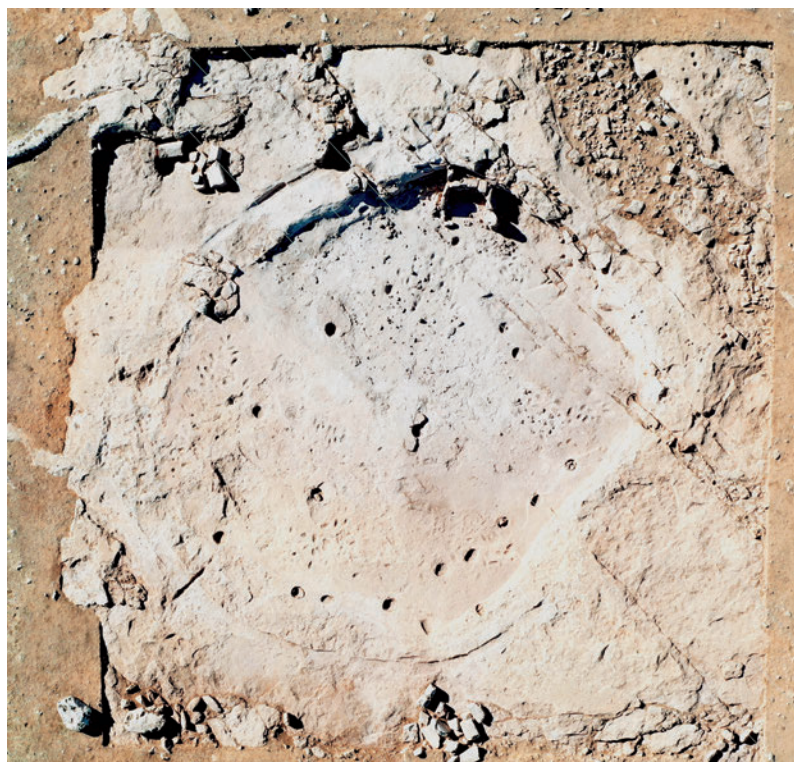


図2 10号建物

された38遺跡のうちの一つである。ハラン平原西方の丘陵地帯には、サイブルチ遺跡、アヤンラール遺跡、ハムザンテベ遺跡などの存在がすでに知られていたものの、組織的な遺跡踏査がおこなわれたのはこれが初めてであった。新たに発見された遺跡は旧石器時代と先土器新石器時代の遺跡がほとんどで、土器新石器時代になるとほぼ遺跡が確認できなくなることと際立った対照をなしている。ハラン平原東方の丘陵地帯においても、先土器新石器時代の遺跡が数多く確認されていることから、こうした状況はハラン平原をコの字形に囲むように広がる丘陵地帯全域に当てはまるものと思われる。先土器新石器時代の末期になると、ギェルジュテベ遺跡のようにハラン平原に遺跡が認められるようになり、先土器新石器時代から土器新石器時代へと移行する頃に、遺跡の立地が大きく変化したことをうかがわせる。おそらくこうした遺跡立地の変化は、主たる生業が狩猟採集から農耕牧畜へと転換したことと関係していると思われる。

### 3. 公共建造物の発見

チャクマックテベ遺跡の頂上部で発見された10号建物は、遺構の東部を除いて石灰岩の岩盤を掘り窪めることによって構築された、きわめて大型の遺構である(図2)。建物を取り囲むように溝状の施設が検出さ

れ、北西部と東部では一部途切れてはいるものの、その部分は浸食などによって失われてしまった可能性が高い。本来は建物を全周するように巡っていたと考えられる。一見すると建物への雨水などの侵入を防ぐ施設であるようにも思われるが、そうした機能を想定するには溝自体の深さがさほどなく、疑問が残る。特に石灰岩の岩盤の表面が傾斜している部分では長さ1m弱の単位が認められ、山側が深く谷側が浅く掘り込まれ、底面が水平になるよう意識されている。また、溝状の施設の幅は30cm前後であり、ほかの遺構の壁の構築方法にもみられるように、そこに大型の板石状の石を立てるように置くのに適しているといえることができる。こうしたことから、この溝状の施設は建物の壁の基礎としての役割を果たしていたものと考えられることができる。もしこの想定が正しいものであるならば、10号建物は楕円形に近いプランをもつ、長軸の最大長が約16m、短軸の最大長が14.2mのたいへん大きな規模の遺構であったことになる。また、この溝状の壁の基礎と岩盤が深く掘り込まれて床面が作出される部分との間は幅が約1mあり、建物の北側から南東にかけては明確に検出できなかったものの、ベンチとしての機能をはたした可能性も考えることができる。

建物の床面は西から東に向け緩やかに傾斜しているが、全体的にたいねいに加工され、表面は平滑に仕上



げられている。建物の床面からは、柱穴の可能性のある穴が、計21基検出された。穴の位置によって、1)床面中央部付近に位置するもの、2)床面の縁辺部に位置するもの、3)ベンチ状の高まりの縁辺部に位置するもの、の3グループに区分することができる。床面中央部付近からは計8基の柱穴が検出されたが、その内の6基は1間×2間の矩形を構成しており、上部構造を支えるための支柱穴としての役割を果たしていた可能性が考えられる。また、残りの2基については、何らかの理由でその構造を補強する必要が生じ、追加で設けられた可能性がある。床面の縁辺部から検出された柱穴は、建物の西側から北側にかけて集中して認められ、間隔は不規則であるが一列に並ぶように10基が検出された。南側にももう1基検出されているが、今のところ単独で確認されている。ベンチ状部分の縁辺から検出されたのは2基のみで、長軸が建物の中央部分に向いていることが特徴である。これらの柱穴状の掘り込みが本当に柱穴であったかどうかはなお検討を要するが、木柱のための柱穴であったとするならば、その当時ある程度の太さの樹木が遺跡周辺に生育していたと考えることができる。また、石柱のための柱穴であった可能性も考えられるが、石柱が原位置で検出されているわけではないため、これは想像の域を出るものではない。

10号建物のもう一つの特徴は、遺構が廃絶された後に、短期間のうちに意図的に埋められていることである。遺構の覆土内からは、拳大のものから1mを超えるような大型の石まで、大小さまざまな石が大量に検出された(図3)。覆土内からは打製石器は出土するものの、動物骨はほとんど出土せず、自然の営為によって埋没したとは考えにくい状況にある。また、礫が大量に検出された部分において、大型の石を意図的に並べている石列状の遺構も検出されていることから、この建物を埋め戻す際に、ある程度の計画性をもってその作業がおこなわれたことがうかがわれる。また、石列を構成する大型の石の中には、ていねいに加工された石柱の破片と思われるものも認められ、この建物には石柱が立てられた可能性も考えられる。さらに、10号建物の北側と南東側には、ていねいに加工された石がまともに検出された地点もあり(図4)、その位置から考えるとこれらも10号建物と関係するものであった可能性がある。これらの石の形状には共通点がみられ、小口側の一面が平坦に仕上げられ、反対側は角が丸みを帯びる形で加工されている。これらが接

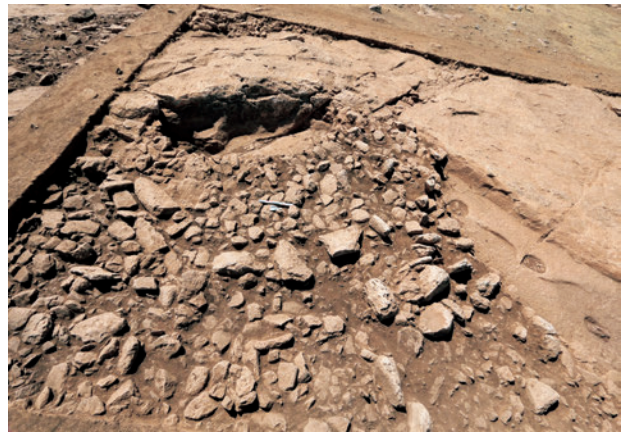


図3 10号建物覆土の状況



図4 I字形石柱出土状況(10号建物の南東)

合し石柱を構成することが確認できれば、ある程度の高さをもった石柱が複数立てられていたことも想定することができるようになる。上端部の破片とみられる石も確認されており、全体としてはT字形ではなく、I字形の石柱として復元できる可能性が高いとみることができる。

#### 4. まとめ

チャクマックテベ遺跡は先土器新石器時代の初頭に当たるPPNA期に居住された集落遺跡であると考えられ、「石の丘プロジェクト」の一環として調査されている遺跡の中では、今のところ最も古い時期の遺跡であるということが出来る。エル・ヒアム型尖頭器のようにこの時期に特徴的な石器が出土していることや建物のプランが円形を呈する半地下式のものであることが、その証左となると思われる。10号遺構が検出された発掘区の北西方に設定されたG-7区では、10m×20mの範囲の中に半地下式の円形プランの建物も多数検出された。例外として複数の部屋から構成される、やや大型の遺構もみられるが、その多くは直



図5 14号建物



図6 2号建物石皿出土状況

径が4 mほどの単室の小型の遺構である(図5)。こうした建物からは動物骨や玄武岩製の石皿なども出土しており、住居であった可能性が高いと考えることができる(図6)。遺跡が居住されていた時期や季節については、今後動植物資料を中心に分析を進めていく必要があるが、検出された遺構が石の壁によって構築されていることや石灰岩の岩盤を掘り込むなど、大きな労力が投入されていることをみると、定住度のかかなり高い遺跡であったと評価することが可能である。

シャンルウルファ市周辺の先土器新石器時代の遺跡では、ギョベクリ・テペ遺跡やカラハンテペ遺跡に代表されるように、T字形石柱をともなう遺跡が数多く確認されている。サイブルチ遺跡やセフェールテペ遺跡では、一般の住居であったと考えられる建物からもT字形石柱が検出され、公共建造物だけにT字形石柱がみられるわけではないことも明らかになって

きた。これらの遺跡の多くは、石器の様相などからPPNB期の遺跡であると考えられている。チャクマックテペ遺跡の石柱が上端部に突出の認められない「I字形」であるとするならば、それは遺跡の年代的な古さと関係していると解釈することができ、T字形石柱のプロトタイプとして位置付けることができると思われる。もしそうであるならば、T字形石柱をともなうギョベクリ・テペ遺跡のⅢ層は、チャクマックテペ遺跡よりも時期的に新しいと考えなくてはならなくなる。

#### ■参考文献

- ・ Çelik, B. 2010 Hamzan Tepe in the light of new finds. *Documenta Praehistorica* 37: 257-268.
- ・ Karul, N. 2021 Buried buildings at Pre-Pottery Neolithic Karahantepe. *Türk Arkeoloji ve Etnografya Dergisi* 82: 21-31.